
『運命』は信じないけど『宿命』は信じるんだよ！

パンドラ・L・ロジャー

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『運命』は信じないけど『宿命』は信じるんだよ！

【Zコード】

Z5529Z

【作者名】

パンドラ・L・ロジャー

【あらすじ】

「ぐぐぐ一般的な少年『黒霸 裏亞』は、『この世界は本当にひとつだけなのか』という悩みを持つ。その悩みを理由に、ひょんなことからもうひとつ世界の存在を知ってしまう。様々な人間から期待されつつ、彼と、その仲間たちで、異世界のバケモノ『ジョーカー』に立ち向かっていく、異色ファンタジー。

第1話 リア、スタートを切る

朝、起きたら、なぜかパソコンを使いたいという衝動にかられた。一階にいてないけど、なぜか母さんがいることが分かる。いたらもつと騒がしいはずだ。

オレの名前は、『黒霸 裏亞』^{くろはく りあ}。現在、13歳。恰好は、君にお任せする。

パソコンを付けた。最近オレは、いろんなサイトを見比べている。これはある悩みのせいだ。

悩みっていうのは「この世界は本当にひとつかってこと」。まあ、オレが異世界ものの漫画が好きだからかもしれない。でも、多分それは関係ない。まあ、その悩みにはあまり触れないでおこう。

「何だこれ？」

気づけば、何か変なサイトに行っていた。無論、オレは何もしてない。戻ることもできないし、消すこともできない。一回、強制終了をしてみようと思つたけど、電源は切れない。

『悩み、募集中』。そう書かれた掲示板。悩みを書いてみようか？別に、誰にも笑われはしないし。

『誰かいる？』

返事はない。チャット系だから、多分このオーナーはこれを管理して、多分今も現在進行中で見てているはず。

『悩み、書ひそ？』

返事はないけど、一応、書いておきたい。

『世界は一つだけじゃないと悪い。多分、まだひとつはあるはずだ』

まだ返事はない。続けようか迷つたが、続けるしかないよな。何を打つかは頭の中では考えてないけど、サラサラと指が動く。昔からそうだ、機械を扱うのは得意なほうなんだ。

『理由はないけど、多分、ある。世界はひとつじゃない』

『その通りだ』

返事が来た？おそらく、このオーナー。しかしそれ以上に、この反応が気になつた。『その通りだ』？こいつもオレと一緒にあたまがおかしいのか？

『どうじつ意味だ？』

『この世界はひとつでは無い。もうひとつある。それに私の名前は「アカルス」。何か質問は？』

『なぜそう、断言できる？なんなら、オレもここへ連れて行ってくれよ、アカルス』

『君なら、行けるかもしれない。集合場所は君の家にもつとも近い橋の下』

『え、ちゃんと待て…』

ついつい、声に出た。だが、オレの意思とは反対に、パソコンの画面は真っ暗に消えてしまった。さっきは消せることが出来なかつた

のに。

本当に、ヤバくなつてきた。行つたほうがいいのか？でも、これがもし、オレの悩みを解消するキッカケになるなら、行つたほうがいいよな？

オレは、パソコンを閉め、服を着替え始めた。

「つたく、ふざけやがつて」

思わず口から声が漏れた。そう、ふざけてる。イタズラだ、迷惑メー
ル的なものだ。そう思いたかつたけど、心の中のオレが言った。『
二度とないチャンスかもよ？』

だよな。

で、これにいたる。橋の下には誰もいない、アカルスつてやつも
いない。と思つていた。

「おーい！おまえがリアかー？」

川の向こう岸から聞こえる、少年の声。ずっと足元を流れる川ばつ
かり見てたから、前を見てみた。川の向こう岸に、銅色みたいな髪
で、青いジャージを着た少年が立つている。オレと年代が同じよう
だから、おそらく13、4歳ぐらいだろう。

「おまえはー？」

少年は、オレのほうに向かつて、手でストップサインを作り、川
を歩いてきた。バチャバチャという音が気になつたが、少年はそん
なこと気にしていない。

「オレの名前は、メノウ・スーラス。侵入者だ」
バイロット

「パイロット？ つていうか、アカルスは？ オレはアカルスと待ち合
わせしてこむんだ」

「セツ固こじと鹽づなつてー。」

少年 メノウと名乗るこの少年 は、まるで前からオレの友達
だつた様に、背中をバシバシ叩いてくる。いつもヤツは、別に嫌
いじゃないが、好きでもない。

「アカルスの代わりに来たんだ。えーっと、そのー、あれだ。来れ
ないって言つからーまつたく、世話が焼けるぜ」

「で、これからどうするんだ？ どこに行くんだろ？」

「その話はまたあとでー。わあ、ついて来い！ リ……、なんて呼べば
いい？」

「リアで良いよ」

「じゃあ、リアー・レッシ、ゴーー！」

こんなハイテンションにはついていけない。でも、何だか楽しそ
うだ。

はたして、何キロ歩いただろ？ オレはランニングみたいな感
じで走っているが、メノウはそう苦労していない。手を頭の上で組
み、その状態で、スキップみたいに走っている。

「メノウ、ビニコレくんだよ？」

「んー。集合場所？」

「集合場所は、橋の下だろ？」

「まあまあ、そういうことは気にするなってー。」

いや、気にするだろ。そう呟いたが、メノウには聞こえない。

「よし、いいで良い」

メノウは、河川敷上にある道路でとまつた。メノウはポケットからケータイを取り出し、誰かに電話をかけ始めた。

「なあー。まだかよー、いや、それは謝るつて！だからさ、車！」

メノウはまだ気づいていないのか？メノウは道路に背を向けて喋っている。車が欲しいらしいが、もう車は来ている。リムジンみたいな黒い車で、全体が黒光りだ。

運転席から、白髪で、執事みたいな服装のおじいさんが出て来た。老眼用か、メガネをかけている。おじいさんは後部座席のドアを開けた。中から、スーツに身を包み、黒いサングラスをかけた男が出て来た。

「こいつが？」

スーツ男は、オレのほうを見ていった。おやじく、オレの事だろう。

「ああ、橋の下。時間ピッタリに来た。覚悟はできてるんだじゃな

いか?」

「だが、全てを選ぶ権利は、この二つにある」

「じゃあ、いま選択をせねば良い」

「一体何の事を言っている? 選ぶ、選択? 権利? オレが何を決めるつていうんだ?」

「メリー」

スーシ男が言った。後ろでおじいさんが小さく頷いた、彼がメリーだ。スーシ男は振り返り、片手を差し出した。メリーはポケットに手を入れ、何かを取り出し、それを差し出した手の上に乗せた。

スーシ男が振り返った。さつきは片手で持っていたが、ふたつ以上あるのか、両手で持ちだした、両手を握っている。

「では、聞こう。本当に、もうひとつ的世界を知りたいのか?」

オレは戸惑つたが、少し遅れて頷いた。

「苦痛の連續、悲しみの連鎖。この世界にいるほうがこぐぶんマシだ」

「……」

オレはどう答えばいいのか分からなかつた。「そうですか」とも、「まあ、大変」とも、どちらも言えなかつた。

スーシ男は、両手を差し出し、開けた。右手には、黒く『1』と書かれた、赤い小さな、錠剤みたいなカプセル。左手には、黒く『

『〇』と書かれたこれも青い同じカプセル。

「『〇』を選べば、私達の事もすべて忘れ、今までの悩みも消え、『△』一般的な人生を送れる。反対に、『一』を選べば、このまま不思議の道を走り、真実を知る。どちらも、選ぶのは君だ。自分の心の思つままに選び、それを飲み込め」

そう言われたが、心中ではスーツ男に言われた言葉が気になる。『苦痛の連續』、『悲しみの連鎖』。何が待っているのか分からぬ。

オレは、ゆっくり、青い『〇』のカプセルに手を伸ばした。視界の端で、メノウががつかりしているのが分かる。

「どうだ、今の気持ちは？」

スーツ男が聞いた。オレの差し出した手が、ピタッと止まる。オレは顔をあげ、スーツ男を見た。

「むりに答えなくていい。私は君を、詳しくは知らない」

なあ、少しは知つていい。心中で誰かがつぶやいた。

「しかし、君は心の中でこう言つている。『逃げる』と。しかし、もう一人のほうは……？おそらく、こう言つているだらう。『逃げる気か？』」

「よくやつた」

気づけば、オレの手は、赤い『〇』カプセルをつかんでいた。水なしでも飲めるらしい、誰も水を出さうとはしない。

「本当にいいのか？最終的に決めるのは、自分だけだ」

「ああ、もう悔いはない」

オレは、カプセルを飲んだ。やけに首につまる感じがした。オレが飲み終えたのを、スーツ男が確認すると、サングラスをとり、オレの目を見始めた。

「なるほど」

「効果は？」

メノウが聞いた。この薬には、何の効果があるんだ？

「なかなかだ。侵入するのに問題はない」

何を話しているのか、よく分からなかつたが、聞かないでおいた。

「で、オレは今からどうし？」

「知らなかつたのか、メノウが言つたものだと。我々の本拠地だ」

「ホーム？つていうか、あなたは誰ですか？」

スーツ男は、サングラスをかけなおし、リムジンのほうに歩き始めた。

「気づかなかつたのか？もう気づいたものかと」

いや、正直、オレもおまえが誰か知っている。

「アカルスだ、さあ、行くぞ」

メノウは、また楽しそうに手を頭の後ろで組み、リムジンのほうにスキップしだした。アカルスは、助手席に座り、メリーは運転席に座ろうとしている。

後になつて後悔した。

そなんだ。

オレは、異世界に行くための準備を、完璧に整え、今から行こうとしていた。

第1話 リア、スタートを切る（後書き）

何たつて、まだまだ12歳なんで（笑）。しかも、小六なんで（笑）。

何か欠点とか、もつといこうすれば良いとかあれば、ジャンジャンお願いします！それと、サラッと言つだけで良いんで、□□//ででも広げてくれればなー、と。

けつこうな長編小説にしようかなーって口口です。皆さんのアドバイスが、面白くさせてくれるので、これからも宜しくトス。

第2話 リア、眞実を知り、少し天狗になる

黒いリムジンの中では、まさに『沈黙』だった。

運転しているメリーとアカルスは、まったく喋らうとしない。オレも何を喋つたら良いのかわからない。メノウは、ループック・キュークをそろえてはガチャガチャにし、そろえてはガチャガチャにしている。メノウは、こういう静かな場が苦手なのだろう、さつきからずつと、貧乏ゆすりをしている。

「ああ、もう！なんか喋れって！」

となりでメノウがものすごい勢いで立った。天井に頭が当たったのは、勘弁してやってくれ。

「なら、何を話す？案はあるんだろう？」

アカルスの言ひとおりだ。何を話すんだ？

「あーホラー自己紹介！まだ詳しく話していないだろーー？」

メノウが、天井でぶつけた後頭部をさすりながら、座つた。

アカルスがため息をつきながら、喋りだそうとしている。面倒くさいというのが、恐ろしく伝わってくる。

「アカルス・ベン・ノーベリック。『ガーディアン』の最高責任者だ」

アカルスの本名は、「アカルス・ベン・ノーベリック」なのか。

「ガーディアン?」

「これから、オレたちが行くとこ。行けば良くわかる」

オレたちが行くとこ? ガーディアン……。一体どついう場所なんだ?

「では、つぎは私が

運転席に座っているメリーが言った。

「本名、メリー 北河きたがわでございます。『ガーディアン』の養成係で、
スナイパーでございました」

また、ガーディアン。でも、それ以上に気になつたことがあつた。

「スナイパー?」

「ガーディアンについたら、詳しく教えてやる」

アカルスはオレをそうやつて止めた。横でメノウは、そろえたル
ービック・キューブをオレとメノウの間に置いて、話し始めた。

「ヨシッ! オレの番だな! ? 本名メノウ・スーラス。ガーディアン
では、侵入者をやつてる! ?

その後、重苦しい沈黙が流れた。騒ぎは一時的、すぐに終わって
しまった。ヤバい、オレが話題を出さなきゃ! -

「あの……!」

「着いた」

アカルスがそう言って、オレを見てきた。「何か?」とでもいいたげだ。

「リア、なんか言おうとしたか?」

メノウは、席に置いていたループック・キューブを取り、またガチャガチャに始めた。どうせ、すぐにやるうだろう。メノウは、アカルスとメリーを抜き、先頭に立ち、両手を空高く上げた。

「いやー、久しぶりだなー！何年振りだら？」

そんなに来てないのか？何年ぶり？

「三時間ぶりだ」

アカルスが歩きながらメノウの頭をポンッと叩いて言った。
つていうか、ここはどこだ？気づけば、森林に囲まれた空き地みたいなどころだ。

「ここは？危なくないか？」

オレは、目の前に建てられた木の看板を見ながら言った。看板には、『危険！ 注意！ 近寄るな！』って書かれている。

「ちょっと失礼」

メノウが、手をチョップみたいな形にして、オレの前に、看板の前に立つた。

「ガーディアン」

看板にはそんな文字、書かれはいない。すると、看板の根元が、四角形に開きだした。看板は、そのまま黒い四角形の暗闇に沈んでいった。そしてできた四角形は、一辺1メートルぐらいで、人が入れそうだ。さらに暗闇の中がライトで照らされた。

暗闇の中には、階段があつた。

「よつこや、リア。ここが、ガーディアン守護者だ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5529z/>

『運命』は信じないけど『宿命』は信じるんだよ！

2011年12月20日18時04分発行